

## シュガーコートは雨に溶け

上京してからわずかのあいだに、ベルトの穴ひとつぶんは痩せたようだ。授業の終わった夕方、大学の正門を出て歩きながら、聡史は自分の腹を撫でてみる。生まれつき胸板の薄いヒョロリとした体格がますます貧相になり、銭湯に行くたび劣等感が募ってくる。先日など、縁の錆びた鏡の前に座って身体を洗おうとしたら、隣で湯を浴びていた三十くらいの男が無遠慮にこちらをながめ回し、不自然なほど親しげな笑みを浮かべた。浅黒く盛り上がった肩をそれとなく寄せながら、

「きみ、まだ十代？ これからうちに遊びに来ない？」

唐突な誘いに、聡史が黙っていたら、

「お小遣いあげるからさ。二万円はどう？」

あまりにもさりげなくささやかれたので、意味を理解するのに少し時間がかかった。聡史が頬をこわばらせて相手を見つめていると、男は急に吹き出して笑った。片目をつぶってひとこと、

「冗談、冗談」

軽く言いながら、タオルを首にかけサツと立ち上がり、すたすたと行ってしまった。

とつさに言葉を返せなかったのも悔しいが、それより何より、そのあとしばらく脱衣所に出るのが怖くて、色白の肌が赤く茹だるほど浴槽に浸かっていた自分が情けない。あれ以来、聡史のもうひとつのコンプレックスであるコミュニケーション機能不全が、ぐんと悪化したような気がする。

そもそも人と喋るのが苦手なのだ。幼いころから、言葉が遅い子だとよく言われた。誰かに何かを訊かれても、即座に反応できない。頭の中で返事を懸命に考え、いざ口を開こうとしたときには、たいていもう相手は焦れてしまい、まともにも聞く気もなくなっている。

「どうしても東京まで出んといかんの？ 大阪でも京都でも大学は

たくさんあるでない」

介護士の資格を取るため養成学校に通っている姉から、なじるように訊かれたあのときもそうだった。何か言おうと顔をあげたら、「ほんま頑固な子じゃなあ。まあ、あんた自身の進学やけん、好きにしたらええけんぞ」

ため息とともに、勝手なピリオドを打たれてしまった。

なにが大阪だ。大阪なんか、徳島からだとも明石大橋で渡ればすぐそこじゃないか。せつかくこの家を出られる機会なのだから、聡史にしてみればもつと遠くへ行くほうがいいのだ。それに、東京。TOKYOでのひとり暮らし。なんだか、そのほうがカッコいいじゃないか。

けつきよく親と一緒に契約したのは、洒落たワンルームマンションじゃなくて、築二十五年のボロい木造アパートだったけれど。

仕送りはこれだけしか出せないと言われ、アルバイトに精を出そうと決めたはいいが、いまだ求人広告の一枚も見えていないけれど。

入学してもう二ヶ月半が過ぎたというのに、女の友だちはおるか、親しい同性の友人すらできないでいるけれど。

洗い忘れてもう四日も着続けている安物Tシャツの、汗で煮しめたような匂いが気になるけれど。

だが時間はある。四年間。気楽なひとり暮らしの学生生活をエンジョイするだけの。そのあとも、うまくいけば、こっちで就職するのを許してもらえるかもしれない。製麺業を継ぐなんて真つ平だ。そんなのは姉がやればいい。恭子は昔から、あの製麺機を操る親の周りをうるつについては、洋服を粉だらけにして叱られていたのだから。

いったん下宿へ戻ると、しばらく万年床に寝転がって少年ジャンプを読んだ。六時すぎにはTシャツを脱いで洗濯機に放り込み、近くのコンビニまで行く用意をした。押入の中に頭を突っ込んで、なるべく臭くないシャツを選びだし、先週短く切ったばかりの髪にワックスをつけ、財布をジーンズの後ろポケットに押し込む。カツカレーはもう飽きたし、やきそば弁当は不味かった。サンドイッチじゃ腹がもたないし、今夜は何にしようかなど考えをめぐらしながら。

本当は、自炊しろと言われていたのだ。毎日ちゃんと野菜を食べんといけんよ、と。おせっかいな母親は、いつ買ったのか、『超簡単、スピーディな一人暮らしの食卓』と題のついた本までもたせてくれた。ぺらぺらとめくってみたが、だいたいこれまで台所に立ったこともない聡史には、わからないことが多すぎる。

『じゃがいもは皮をむき、一口大にきりましょう』  
一口大つて、どれくらい？

『塩こしょうを少々』  
少々つて、どの程度？

この曖昧な言い回しのオンパレードに聡史は苛立つ。何立方センチとか、何グラムとか、きちんと書いてくれたほうが分かり易いものを。

それに、毎晩ちがった総菜を一人ぶんずつ作るうとすると、必ず食材の余りが出る。半玉になったキャベツや使い残した豚バラ肉は、冷蔵庫に入れておいてもいつのまにやら腐るか、ひからびている。不衛生で、不経済なことこのうえない。

そんなこんなで、料理本の存在は次第に忘れ去られ、聡史の食生活に関して言えば、朝はろくろく食べない、昼は学食の安いランチ、夜はコンビニで弁当を買う、というパターンが定着しつつある。

夜の自炊を諦めてしまったのには、ナナちゃんの影響も大きかった。今ごろ、あの子はレジにいるはずだ。月曜から木曜までは、この時間帯のシフトに入っている。青いコンビニの上っ張りの下には、いつも白いブラウスとチェックのスカートという制服だから、たぶんどこかこのあたりの高校生に違いない。一年生か、二年生か。顔立ちはまだ幼い。

聡史は、ひとめ見たときから彼女に惹かれている。

レジの向かいで見た名札の文字は七重。珍しい姓だ。なんと読むのかと思っていたら、あるときバイト仲間らしい青年が、ナナエさん、と呼んでいたのを耳にした。

ナナエさん。ナナエさん。

心のなかでは、ナナちゃんと呼ぶことにした。

色白で背はそんなに高くなく、肉付きはぼつちやりしていて、大

きな黒目がちの瞳すれすれに前髪がサラサラ落ちかかっている。少し舌足らずな高い声で、いらっしやいませ、と声をかけられると、いつもそれだけで心臓が飛び跳ねる。手足の動きが、自分の意志とは無関係にギクシヤクし始める。

ナナちゃんはレジの向こうで、ありがとっございましたと言いなから、釣りの硬貨を聡史が出した手のひらへ、二センチほどづえから落とす。必ずそうする。それとなく見ていたが、どの客にでもそうする。手と手が触れそうで触れない二センチの距離に、彼女の少女らしい恥じらいが見えるような気が、聡史にはする。ぎゅっとそのまま、ふっくらした手を握りしめたくなる。

だが、しない。当たり前だ。

それどころか、話しかけたこともない。これだけ毎日のように通っているながら。

「お弁当、レンジで温めますか？」

「はい、お願いします」

これがまともな会話だと言えないことくらいわかっている。だが、教室でも学食でも、めったに人と話さない生活では、こんなささやかなやりとりが、一日の終わりをなんとなく幸せにしてくれる。だから、今夜もコンビ二に行く。せめてナナちゃんに、あと二センチの距離まで近づきたくて。

電子レンジがブーンと唸っている一分間、そのあいだに、

「きみ、高校生？ この近所の学校？」

「今日は、暑いね。外はムシムシしてるよ」

「その名前、なんて読むの？ 珍しいね」

なんとでも声をかければいいのに、聡史にはできない。

わざとそうしているわけでもない仏頂面で、温めてもらった弁当を黙って受け取ったら、そそくさと帰ってくるだけだ。温もりのあるうちに弁当を食べてしまうと、万年床にまた寝転がり、小さなテレビをつける。どこかの列車が転覆事故を起こしたとアナウンサーが言っている。死傷者の名前が流れていく画面をぼんやり見つめながら聡史は、この一方通行の苦しさで決着をつけられないものかと考える。

男のくせに臆病だから、いつまでたっても彼女ができないんだ。

今度こそ思い切って話しかけてみる。

でも、話しかけても変な客だなと思われるだけなら、まだ今のままのほうがマシだ。嫌そうな素振りでもされたら、店に行って顔も合わせられなくなる。

いや、向こうの反応が悪かったら、潔く諦めればいいだけだ。コンビニなんて、あそこと別方向にも二軒あるんだし……

なにひとつ行動も起こさず、うじうじと堂々巡りしている自分が嫌になってくる。

女の子に触ったのは、小学校の体育でフォークダンスを踊らされたのが最初で最後だ。あのときは嫌々やっていたけれど、この歳まで女の子に縁がないとわかっていたら、もっと真面目に手をつないでおいただろうか。店に行くたび盗み見ているナナちゃんの胸の丸みが、執拗に脳裏をかすめる。

きつと、柔らかくて気持ちいいんだろうなあ……

無意識のうちに下半身に右手が伸びる。が、日々の習慣のオナニも、彼女ではやらない。まさか、あの子を妄想のネタにするなんて。万年床の枕の下からエロ本の最新号を取り出すと、気に入ったページを探して素早くめくり始めた。

行為のあと、醒めた眼差しで起きあがった聡史は、使ったティッシュを丸めた。ふうと息を吐きながら無造作に放り投げる。それは、青い匂いの軌跡を描きながら、屑籠の縁に当たって落ちた。その畳の一角には、まだそんな白い塊がいくつも転がっている。

スニーカーを履き、玄関を出てしばらくすると、小雨が降ってきた。わざわざ傘を取りに戻るのも面倒だったが、せっかく整えた髪型が崩れるのも嫌だった。しょせんはただの常連客のひとりにすぎなくても、雨でぺしゃんこになった頭をナナちゃんに見られたくない。聡史はまたもと来た道を引き返し、アパートの鍵を開けた。ドアの内側から透明のビニール傘をつかむと、それをさしながら歩きだした。

派手なコンビニの看板が見えてくると、次第に緊張が高まる。

今日こそは何か話しかけるんだ。なんだったっていい、例えば、

(その名札の名前、なんて読むの?)

これじゃ、馴れ馴れしすぎるか。いや、きみに関心があるんだってことを示さなくちゃ意味がないんじゃないのか？ とにかく、電子レンジがチンと鳴るまでに。

たいして濡れていない傘をガラスドア前の傘立てに投げ入れたとき、向こうのゴミ箱が、いつになく目に留まった。空きカン、空きビン、その他のゴミと仕分けられた大きなゴミ箱の足元に、金色の紐がついた赤い紙バッグが、ぼつんと置かれてあったのだ。捨てられたものがこぼれ落ちたのだとは思えない。小さな紙バッグは、まだ新品のように見える。そして、灰色のゴミ箱の前で、その赤は奇妙に目立っていた。

聡史は何の気なしに近づいた。と、一瞬、か細い鳴き声が聞こえた。道路を走る車の音でかき消されてしまうような、弱々しい鳴き声。バッグを取り上げて中をのぞき込む。底に丸まっているのはネズミくらいの大きさの仔猫だった。手のひらにすっぽり収まる灰茶色の猫が一匹、それだけが入っている。ほかには何もなし。仔猫はぐったりと目を閉じているが、時折もぞもぞ手足を動かしている。まだ生きているんだと主張したげに、ウニヤウニヤと鳴きながら。驚いてその場に立ち尽くしていると、雨が少し強くなってきた。

聡史はレジからは死角になったコンビニの屋根の下まで、バッグを持って移動した。

捨て猫かあ？ いったいこれをどうしたらいいんだ？

思わず振り向くと、ガラスを隔てたあちら側に、棚の菓子類をきちんと並べ直しているナナちゃんの後頭部が見えた。バッグの中では仔猫が、かすかに動いている……

聡史はしばらく逡巡したのち、意を決したように自動ドアの前に立った。

「いらっしやいませ」

ナナちゃんと、二十代半ばくらいの太った青年が、ドアチャイムの音に振り返る。

見たところ客の姿は少なく、背広姿の男が雑誌を立ち読みしているだけだ。聡史はもっとさりげなく歩きたかったが、どうしても膝の震えが止まらない。たいしたことじゃない、落ち着け、落ち着くんだ。必死に念じてみるが、無駄だった。動悸がひどく、それだけ

で気分が悪くなりそうだ。が、いつもの無表情に無理矢理すべてを押し隠すと、まだ菓子棚の前にいるナナちゃんに、ゆっくり近づいていった。

「こんにちは、いらっしやいませ」

ナナちゃんが客に気づいてにつこり会釈した。その笑顔から一メートルと離れていない聡史には、もうまともに声が出せない。

「バカ！ ちゃんと言うこと考えておいたろ！ さっき頭のなかでシミュレートしたばかりなのこ！」

なんとかかんとか「外のゴミ箱のところだ」と、不明瞭な言葉を絞り出した聡史は、それきり口ごもって、赤い紙バッグをわずかに差し出した。手が細かく震えているのをどうかナナちゃんに悟られませんかように、と祈りながら。ナナちゃんが少し不審げな面持ちでこちらを見た。彼女に中がよく見えるよう、聡史はバッグの口を開いて見せた。

「きゃっ！」

ナナちゃんが一步あとずさった。なにか汚いものでも押しつけられたように。そのとたん、ひきつっていた喉がようやく楽になって、聡史の唇が動いた。

「捨て猫なんです。おもてのゴミ箱のところで見つけたんです」

「これ……捨て猫、ですか……」

さっと笑みを取り戻したものの、相変わらず彼女の瞳は聡史を警戒している。

「見つけたんで……それで」

「……って言われましても……ちょっとすいません」

ナナちゃんが、ちょこんと頭を下げて聡史の横をすり抜ける。大島さん、と小さく叫びながら、レジに立つ青年のほうへ駆けていった。まもなく、大島青年が彼女を従えてこちらにやって来た。背を心持ち丸めて片手を頬にやりながら、穏やかに訊ねる。

「ええと、外のゴミ箱に猫が捨ててあったということなんですか？」

聡史には、太った青年の後ろからバッグの中を窺い見ているナナちゃんの、きつく寄せられた眉が気になって仕方がない。

「え、あ、そうです。ゴミ箱のところこれがあつたんで……」

「そうですか、たまにいるらしいんですよねえ、生き物を捨ててい

く方が。とにかく、お騒がせいたしました、こちらのほうで引き取らせていただきますので」

バッグを手渡すとき、中の仔猫がまたか細い声をあげた。大島青年は再び、どうもお騒がせいたしました、と礼儀正しく頭を下げ、レジ奥にあるドアへ向かっていく。ナナちゃんもその後を追いなから、振り返りもしないでさっさと行ってしまった。

安菓子子を並べた棚の前に、聡史ひとりが取り残されるかたちになった。しばらく二人の様子を見ていたが、なんだかいたたまれなくなつて、聡史はポケットに両手を突っ込むと、大またに自動ドアをめざした。レジの前を通り過ぎるとき横目で見たら、ナナちゃんは大島青年と何やらひそひそと冗談を言い合っているようだった。逃げるように外へ出るときも、ありがとございました、という明るい声が、今日は聞けなかった。

こんなはずじゃなかった。

あのバッグの中を見せたとき、ナナちゃんは、あんな顔をするはずじゃなかった。

うわあ、かわいそう、と彼女はまず驚いて、そのあと二人で、あの哀れな仔猫をどうしたらいいかと、額を寄せながら話をするはずだったのに。

聡史は小雨のなかをアパートまでまっすぐに戻っていった。五分もかからない近さなのに、早くもTシャツやスニーカーの生地がジツトリ湿ってきて気持ちが悪かった。

部屋の扉に鍵を差し込んだとき、傘を置き忘れてきたことに気づいた。ちゃちなビニール傘だから、どうなつてもいいようなものだが、明日の朝一番の授業に、もしや濡れて行かねばならないのかと想像すると、あんなものでも貴重だと思ひ直した。

ため息をつきながら鍵をポケットにしまい、聡史はゆっくりと引き返し始めた。暗くなつてしまえば、明るい店内から外の傘置き場にいる人間の顔など、はっきりわからないだろう。どのみちそんなところに誰も関心を払いはしないのだが。

アスファルトの浅い水たまりに街灯の明かりが落ち、ぎざぎざと輝くモザイクをつくっている。聡史はつつむき加減に歩いた。コン



ビニ前の交差点で立ち止まる。信号が変わるのを待っていたら、向かいのガラスドアから、あの太った店員が何かを手にして出てきた。薄闇に目を凝らすと、青い上っ張りの背中が例のゴミ箱に近づいていく。カン・ビン用ではない一番右端の箱。彼が持っていたものを投げ捨てる瞬間、店内から漏れる白い明かりを受け、半透明のビニール袋の中身がぼんやり透けて見えた。少しばかりの雨に濡れるのも嫌そうに、青年は頭を片手で覆うと、また急いでドアの中へと走り込んだ。

横断歩道を渡った聡史はゴミ箱に駆け寄った。右端の投入口からは、さっきあの青年が捨てていったビニール袋の端が見えている。手を差し入れてそれをつかみ出すと、聡史は声をたてずに叫んだ。

やっぱり……！

コンビニのビニール袋の口は、きっちりと結ばれていた。それを破ると見覚えのある赤い紙バッグ。その口もまた、開かないようセロテープでとめてある。中には仔猫がまだ入っていた。相変わらず目を閉じたまま、弱々しく手足を動かしている。のぞき込んでいる聡史のほうに少しばかり鼻づらをあげ、ウニャアと短い四肢を突っ張った。

ガラスを隔てた店内を見れば、ナナちゃんがレジの前に立ち、若い女性客に釣り銭とレシートを渡している。その横では大島青年が、精算の終わった商品をビニール袋に詰め込んでいた。そろってにこやかな笑顔をつくり、ありがとございました、と口を動かしている。女性客が袋を受け取り、ドアへと歩いて来るまえに、聡史は急いでその場を離れた。赤い紙バッグを抱えたまま、点滅する信号機の黄色い円に向かって駆けだした。

部屋から電話をかけると、姉が出た。

「聡史か、あんたどないしたん？ どこか具合でも悪いん？ お金たりんようになつたん？ 東京からのコレクトは高うつくけん、はよ言つて」

せっかちにたたみかける。

「……姉ちゃん、仔猫つて、どつやって育てるん？」

「はあ？ なんよ、唐突に。猫とあんたと、どついう関係がある

ん?」

「今さつき、こんまい仔猫ひろてしもた」

受話器の向こうで、ふんと短い鼻息が聞こえた。

「まあ、あんたは。そんなもん、捨ててきな。あんたになんか、よう育てんわ。第一、育てて大きくしてどないするん? そっちの下宿で猫なんか飼うのは禁止されとるんと違うん? 大家さんに見つかったら怒られるで」

「ぜったい見つからんようにするけん。とにかく、ここにおる仔猫がぐったりしとるけん、どないしたらええんか、姉ちゃん知つとつたら教えてえな」

「そう言われてもなあ。うちやって知らんわ」

姉のすげない口調に、聡史は焦れた。

「もうええ、姉ちゃんは。母ちゃんに代わって。母ちゃんなら知つとるかもしれんけん」

「いま、母ちゃんおらんのものよ。じいちゃんと病院に行つとるけん。じいちゃん、今朝から咳が止まらん言いよったきん、石田先生んとこ連れてつたんよ。もう、じき戻ると思っけんど……」

聡史には、継ぐべき言葉がなくなった。と、恭子が何か思いついたように早口で言う。

「聡史? 聞いとるん? その猫な、ペットショップか動物病院に連れてつたらええんと違うん? 誰ぞ貰い手を探してくれるかもしれんよ。なあ」

「……わからん。でも、そうしてみる」

「そないしで。ほいで、もうあとは用事ないん? あんた、元気でやつとるん?」

「うん、元気元気。母ちゃんにも、みんなにも、そう言つといて。ほたら、切るわ」

ペットショップに動物病院。

考えてもみなかった。

分厚い電話帳を繰って、聡史はこのあたりで開業している動物病院を探した。アパートからもっとも近い一軒に電話をかけると、中年と思しき女性が応対に出た。つかえながら訳を話していると、困惑を隠そうともしない声音にさえぎられた。あのねえ、この時期

は捨て猫が多いんですよ、だからこういつ問い合わせもちよくちよあるんですけどね、可哀想だからって、うちでみんな引き取ってお世話するわけにもいかないんですよねえ。

「実際に見てみないとわからないけど、まだ目が開いてないんですよ？ 生まれて一週間もたつてないと思いますよ。とにかく保温して、哺乳器で一日に五、六回、温めたミルクを飲ませてやって、あ、人間の飲む牛乳じゃなくて猫用のミルクね、あと、まだ自力じゃ排泄できないから、それも手伝ってやらないと…… ちよつと電話じゃ説明むずかしいんで、今からこつちに来てもらえます？ まず健康診断して、それから育て方を説明しますんで。ミルクや哺乳器もこちらにありますし」

わかりました、これからすぐ行きます、と病院までの道順をメモしたものの、聡史はだんだん面倒な気分になりつつあった。

ホニユウキで授乳？ 一日数回も？ 排泄の手伝いだつて？

思い出して財布の中をのぞくと、千三百十一円しかない。クレジツトカードはもっていないし、明日には郵便局へ行つて、お金をおろして来なくてはと思つていたところなのだ。健康診断、ホニユウキ、ミルク……これだけで足りるだろうか。そういえば、動物には保険なんかきくんだらうか？ いくらぐらいかかるのか、ちゃんと訊いておけばよかった。

聡史は紙バッグから畳のうえに出しておいた灰茶色の毛玉を見た。じつと目を閉じたまま、あまり動かない。ときどき出す声も、弱々しい。ふわふわと逆立つ毛に触つたら、全身を小刻みに震わせていた。まるで、死にかけているみたいだ。

たぶん姉の言うことが正しいのだろうと、ようやく思い始める。  
(あんだになんか、よう育てんわ…… 大家さんに見つかつたら怒られるで……)

聡史は傍らのティッシュペーパーの箱から残りのペーパーをぜんぶ抜き取ると、空いた箱をくりぬき、その中に何枚もペーパーを裂いて入れた。いつか友人の家で見たハムスターの寢床のようなものができる、そつと仔猫を入れ、その上からまたティッシュを数枚、ふわりとかぶせてやった。

こんなもので保温になるのかな。猫用ミルクだなんて言っていた

けど、一日くらい牛乳でもいいだろう。

冷蔵庫を点検してみたが、あまり飲まない牛乳はパックを開けたまま、もう十日も前に賞味期限がきれている。鼻を近づけてみると心なしか酸っぱいような匂いがした。流しにそれを捨てながら、聡史は少し離れた駅前のスーパーまで行こうと考えた。あそこには確かペット用品のコーナーがあったはずだ。猫ミルク、猫ミルク。それに、ホニユウキ。ホニユウキは、もし値段が高ければ、スポイトみたいなもので代用してもいいだろう。ついでに本屋で猫の育て方を立ち読みしよう。聡史はもう一度、箱の中をのぞく。灰茶色の仔猫は、白い掛け布団のなかで、動きも鳴きもしない……

自分がミルクを買って帰るまでに、このひ弱そうな生き物は、死んでしまっんじゃないだろうか。

（あんなになんか、よう育てんわ…… 大家さんに見つかったら怒られるで……）

それならそのほうが、いっそ気楽だと思った。

どこか土のあるところを探して、仔猫を埋めてやるう。

無駄になった猫ミルクもホニユウキも、もちろん一緒に埋めてやるう。

暗がりの空き地で、ひとり地面を掘っている自分の姿が浮かんだ。小さな穴の前にしゃがみ、冷たくなった仔猫の骸に土をかけながら人知れずつぶやく、ごめんな、悪かったな、明日の朝になったらお金おろして病院へ連れてってやるうと思うとつたのに……

ティッシュが、カサッと乾いた音をたてて動いた。と同時に、甘い憐憫にコーティングされた夢想が、ぱちんとはじけ飛ぶ。聡史はひとつ息を吸い込むと立ち上がった。さて、猫ミルクと、ホニユウキ。買い物から帰ってきて、こいつがまだ生きていたら、名前をつけてやるう。

…… ナナちゃん？

いや、ナナじゃない。ナナに届かないロクだよ。メスでもオスでもロク。

ロクなことにならない、ロクでもない、ロクでなし…… そう、ロクでぴつたりじゃないか。こんな夜、あんな場所に、二度も捨てられたおまえには。

薄く笑いながらドアを開けたとき、けっきょく傘は取り忘れてきたんだと思った。もはやそれは戻ってこないだろう。傘はもう、通りすがりの誰かに持ち去られているだろう。行って確かめるまでもない。

聡史はチツと舌打ちすると、ドアに鍵をかけた。小止みになってきた雨のなかを、駅前まで足早に歩き始めた。

→

(原稿用紙二十八枚)

特別感謝 方言監修：民江叔母さん@徳島